



田中一村《アダンの海辺》©2010 Hiroshi Niiyama

Topics

MASKS—仮かりの面おもて

勅使河原蒼風と戦後美術

開館15周年記念 特別展 田中一村 新たなる全貌

わが心の千葉

MASKS—仮かりの面おもて

仮面の精神とかたち

「MASKS—仮の面」展では、日本をはじめとするアジア、アフリカ、オセアニアを中心に、152点の仮面が展示されますが、世界各地の様々な表情をした仮面に接していると、仮面が単なる芸能の道具ではなく、その表現の根底には常に人間の精神—思想や信仰が関わっているのだということが実感されてきます。

仮面の精神性を語る一つのよい例としては、土俗的な信仰によって作られた日本の東北地方の竈面があります。これは人がかぶるための面ではなく、台所の竈近くの柱に掛けられて祀られる竈神なのだといえます。多くの起源譚において、卑しい身分の醜い男や童、排泄物や死体といった嫌われる存在が家に富裕をもたらし、以来竈神として祀られるようになったと伝えられているのも面白いことです【飯島吉晴『竈神と廁神』講談社学術文庫】。

信仰の対象としての面ということでは、各地に残される奉納の掛面も同様です。神社に奉納され、社殿などに掛けられてご神体を守護する面です。これらは広く鬼神面などとも呼ばれていますが、鬼といっても角があり牙をむく獣的な悪鬼ではなく、災いをはらう強靱な力を持つ畏れ敬うべき存在の神です。またこのような奉納面は、口をかーっと開けた面と、口を固く閉じてくいしぼるような表情をする面、つまり「阿吽」の面が一对で作られることが多かったようです。「阿吽」は、はじめから終わりまで、物事の全体を示しているといいますが、阿吽の面は社殿の左右に掛けられて、ありとあらゆる災いを退ける力を発していると考えられたのです。

それにしてもなぜ、実際に芸能に使用されるわけではないのに、このような竈神や鬼神は仮面の形態で表されなければならなかったのでしょうか。

それは仮面が多分に精神的な働きをする表現であること、人間らしい表情というよりも、



1



2



3



4

精霊や神や鬼など人間を超越した存在を表現していることが多いことに深い関わりがあるように思えます。そしてその仮面の精神性は、世界の仮面文化に共通しているとも言えるでしょう。

日本が古代からの仮面が豊富に残される世界でも稀な国である一方で、韓国のように、古くより仮面劇が発達しながら、災いを招くと信じられて劇が終わるごとに燃やされたり、アフリカでも儀式が終わった後に仮面を処分したりする習慣があり、あまり古い仮面が残らない場合があります。しかしそれもまた日本人と同じように、人々が仮面に畏怖すべき精神的パワーを感じている証拠とも言えるでしょう。ユニークさで人気のあるアフリカの仮面ですが、ほぼ赤道アフリカの農耕社会に限定されて作られていることも興味深いことです。やはり日本人と同様の農耕民族に共通する強い自然への畏怖心と祈りに発して、さまざまな精霊や神々が導き出され、それが精神的パワーを持った仮面という造形につながっていったのではないのでしょうか。

この展覧会では、地域や民族による表現の違いを楽しんでいただくことも主眼にありますが、同時にそこに共通する普遍的な仮面の精神について感じていただければと思います。国や民族の境を越えて共通する仮面の美の本質が、展覧会場にどのように立ち現れて来るのでしょうか。

[学芸員 田辺昌子]

- 1: 宮城・登米地方の竈(かまど)面 19世紀
日本(現、宮城県登米市)
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
- 2: 鬼神面 16世紀 日本 個人蔵
- 3: 王の仮面
20世紀初期 カメルーン・グラスランド地域、バムン
アフリカンアートミュージアム蔵
- 4: 小型仮面
20世紀中期 コートジボワール、ダン
アフリカンアートミュージアム蔵
- 5: 仮面“キフェベ” 20世紀初期 コンゴ民主共和国、ソング
静岡市立芹沢銈介美術館蔵
- 6: 精霊の仮面 20世紀中期収集 パプア・ニューギニア
東北福祉大学 芹沢銈介美術工芸館蔵

関連企画

■ 記念講演会

2010年7月11日(日) 14:00~

「美を創る心・ヨーロッパ・アフリカ・日本」

講師：伊藤満(アフリカンアートミュージアム館長)

会場：千葉市美術館11階講堂 / 先着順150人 / 聴講無料

■ 立寄りワークショップ「多色摺木版画でお面を摺ろう!」

7月11日(日) 10:30—13:30

1Fエントランス奥にて/参加費無料/随時受付

■ プラ板で作る「私だけのお守りマスク・ストラップ」

8月8日(日) 13:00—14:30

11階講堂にて/定員20名/参加費50円

*12:00より8階にて整理券を配布します。

■ 学芸員ギャラリートーク

7月7日(水) 14:00~

■ ボランティアによるギャラリートーク

会期中の毎週水曜日 14:00~(7月7日を除く)



5



6

MASKS—^{かり おもて}仮の面

2010年7月6日(火)▷8月15日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 8月2日(月)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

※()内は前売り、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※前売券は、ローソンチケット(Lコード:38189)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口にて販売(8月15日まで)

Interview 「MASKS—仮の面」の照明担当者に聞く

サムサラ ミュージック & アーツ 代表 竹下誠司さん

皆さんは、美術品を専門にした照明のプロがいるのをご存知でしょうか。本展では、千葉市美術館初の試みとして、美術照明の専門家「サムサラ ミュージック & アーツ」に照明を担当して頂きました。このコーナーでは、展示に先駆け代表の竹下誠司さんにお話を伺いました。

Q: この仕事を始めたきっかけは？

竹下: 照明と言っても初めは音楽・演劇などの舞台にたずさわっていました。その時お世話になっていた方が美術展を担当するので声を掛けていただいたのがきっかけです。それがおよそ20年前ですね。最初のころは美術館の方に“電気屋さん”と呼ばれたりして全く理解されませんでした。最近になってやっと“照明屋さん”と呼ばれるようになってきて…(笑)。徐々にこの仕事を認知して頂いていると感じています。

Q: 今まで、どのようなものを手がけてきましたか？

竹下: 日本画・洋画・写真・彫刻などジャンルにこだわらず担当させていただいています。近年、現代美術の作家とのコラボレーションも増えています。

Q: 照明を当てる際に、心掛けていることはありますか？

竹下: できる限り“自分を出さない”ようにしています。この仕事を始めたばかりの頃は、「本物の照明を見せてやるぞ!」というような意気込みで照明を作っていました。先駆者のつもりで力が入っていたのでしょね。でも、ある作家の個展に携わった時、「こ



1.全体を照らすことで、面のひょうきんな表情が引き立つ
2.左眼の影を延ばして、少し怖い印象に。眉の弧の形や突起している眼などが強調される。

れは“照明”の展示になってしまっているね」と言われてハッとしました。あくまで作品が主役で、自分たちはその作品の持っている本質を最大限に引き出す裏方だということに初めて気付かされたのです。それ以来、存命であるなしに関わらず作家と対話しながら一つ一つの作品と丁寧に向き合うことを心がけています。作品の中心となるモチーフは何なのか、作家がどのような光の中で制作していたのかなど、照明を当てただけで、作品の持つ様々な背景が見えてくることもあります。

この言葉の通り、竹下さんは作品の本質を引き出すために、照明器具のメーカーと協力して製品改良に携わったり、担当する美術館の改装でライティング設備のアドバイザーとして関わったりするようにもなったとか。照明作業は光を当てることだと思われがちですが、実は“影”を作る仕事なのだと言います。展覧会では、光と影が織りなす美の世界も合わせてお楽しみください。

[聞き手：広報 高田紫帆]

勅使河原蒼風と戦後美術

豪放にして繊細、豊饒と枯淡。

勅使河原蒼風と戦後美術— 出品作品から

1945年以降の日本の芸術を振り返るとき、草月流の創始者である勅使河原蒼風(てしがはら そうふう 1900-79)の活動とその足跡は、単にいけばなの世界に止まるものではありません。その姿は、時にみずからの書や彫刻を世界に問う造形作家として、またある時には同世代や若いアーティストたちの活動の支援者として、今日まで記憶されています。

千葉市は、平成3年に草月流初代家元の勅使河原蒼風の作品《萬木千草》(1960)と《無》(1968)の2点を収集し、美術館開館後は平成10年度に芦屋市立美術博物館および朝日新聞社と共同で『草月とその時代 1945-1970』を開催しました。

財団法人草月会では三代家元である勅使河原宏氏(てしがはら ひろし 1927-2001)の歿後、所蔵する美術品のうち、蒼風が制作した木彫の大作《樹獣》(1957)や岡本太郎の油彩《憂愁》(1947)などを東京都現代美術館に、次いで千葉市に蒼風の平面作品やイサム・ノグチの作品を寄託しました。現在、草月会の主要なコレクション「草月コレクション」はこの二館を中心に一般に公開されています。草月コレクションは収集家自らが新しい美術の潮流に参加していた実作者であり、かつ活動の「場」を提供する支援者によって形成された点において、他の同傾向のコレクションとは異なった、希有な性格を備えています。

千葉市美術館では戦後日本美術の証言者とも呼ぶべきこのコレクションについて、平成16年に開催した『勅使河原蒼風とその周辺 草月コレクション 現代美術を中心に』をはじめ、様々な展覧会で展示し、また他館への貸出に対応しています。

今回の展覧会は前述の展覧会に次いで2度目の纏まったコレクション展となります。本展は、財団法人草月会より寄託された作品を中心に、蒼風、そして霞(かすみ 1932-80)、宏の歴代家元が交流したアーティストたちの作品と、蒼風の平面作品を中心とする展示の二部構成、約70点により、戦後日本美術の一断面を紹介するものです。

展示の見どころはいくつかありますが、ここでは勅使河原蒼風による2点の作品をご紹介します。

それは、《曼荼羅》(1958)と《半獣》(1962)です。

どちらの作品も文字が書かれているだけではありません。文字＝漢字の周囲には顔料や銀泥が施され、それがあつた部分は文字にまで浸食することによって、異形の「かたち」が屏風全体に広がって



《半獣》墨、アクリル絵具、銀箔、紙 1962年

おり、判読が困難ですらあります。蒼風みずからが加わったアンフォルメル(非定形)の絵画のように見えますし、技術的な点から見ればこれらの作品は蒼風と交流があつた北大路魯山人(1883-1959)の銀(三)彩の制作技法にヒントを得たと考えることができます。

こうした蒼風のやり方について、書というものや文字を冒流しているとも考える方もおられるかも知れませんが、それは違います。作者は、漢字を創り出した太古の人々と共感し、彼らのエネルギーを屏風に定着させることを目指していたのでした。このことは、たとえば来年生誕100年を迎える岡本太郎(1911-96)の絵画などと比較するならば明瞭でしょう。蒼風は岡本が行きたくとも行くことの出来ない彼岸に立っています。

書や彫刻(あるいは、彼本来の造形手段であつたいけばな)において蒼風が目指していたことは、自分の足下を掘り下げることでした。それは日本人が持つ造形精神の由来をさぐり、さらには人類が普遍的に持っているであろう創造(想像)力の根源に遡ろうとする試みに他なりません。しかしながら、日本の美術の状況は、このような彼の姿勢を長い間受け入れることができませんでした。なぜなら、簡単に言ってしまうばそんなことをしても「いい点が貰えない」からです。しかし、彼のような存在がいたからこそ日本の文化というものは厚みを増し、懐が深いものになっています。

今回ご紹介した2点の作品に限らず、豪放にして繊細、豊饒と枯淡を兼ね備えた蒼風の作品群と国内外のアーティストたちの作品から成る草月コレクションをご堪能いただければ、さいわいです。

最後に、本展覧会を開催するに当たり、貴重な作品群を御寄託賜った財団法人草月会をはじめ、関係各位に深甚なる謝意を表します。

[学芸係長 藁科英也]

■中学生のためのギャラリークルーズ10

7月23日(金)、24日(土) 10:00—15:00

7F展示室「勅使河原蒼風と戦後美術」会場にて/参加費無料/随時受付

■学芸員ギャラリートーク

7月7日(水) 15:00~

勅使河原蒼風と戦後美術

2010年7月6日(火)▷8月15日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 8月2日(月)

[観覧料] 一般 200(160)円/高校・大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上の料金

※千葉市内在住60歳以上、千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、および障害者手帳をお持ちの方とそ介護者1名は無料

※同時開催「MASKS 仮の面」入場者は無料



《曼荼羅》顔料、絹 1958年

田中一村 新たな全貌

ある画家を知っているかたとたずねたとき、田中一村ほど返ってくる反応や抱かれた感情に温度差や格差のある画家もそうはいないのではないのでしょうか。涙が出るほど好き、立ちつくして5時間見た!と熱く「私の一村体験」を語る人がおり、非常に人気がある画家と認識される一方で、特に若い世代など美術関係者でも全く知らず「いっそん」と名前も読めず、さらには口ごもる人多数、そんな画家はいくらでもいた、展覧会を見て関心を一気に失った、という人さえいます。沸点の100℃からマイナス20℃の氷の世界まで、といった感じ。これはどういうことなのでしょう。

田中一村(本名は孝、1908-77)は昭和13年から約20年間、千葉市千葉寺町に住んだ、千葉市ゆかりの日本画家です。50歳の時千葉を発ち奄美大島の名瀬市に単身移住して、紬工場で働き切り詰めた生活をしながら垂熱帯植物などを題材とした絵を描きましたが、公表の機会もないまま同地で生涯を閉じました。没後の1980年代、テレビ番組での紹介が空前の反響を呼び、画集や評伝が刊行され展覧会が全国を巡回し一時はブームのような状態がありました。千葉市美術館は今年の秋で開館15周年を迎えますが、開館前から田中一村を取り上げないのかという声は常に届いており、動きのない当館に対して批判もされていたものです。展覧会の紹介にしては冒頭から耳の痛い話を述べたことをお許しいただきたいのですが、しかしともかく、さまざまな状況と紆余曲折を乗り越えて、ようやくここに、美術館が初めて本格的に取り組む回顧展として、新資料を多数含む約250点の出品作品による過去最大規模の展覧会が実現することになりました。

3年前、一村生誕100年という節目の年を迎えるにあたり、田中一村記念美術館から発せられた所蔵作品を調査し直そうという新しい動きに、千葉市美術館の参加が弾みとなって展覧会での成果発表という目標が定まりました。一村ゆかりの地にある美術館の、専門も背景も異なる学芸員たちが協同して各地にある作品の調査をし情報を共有し、従来の評伝の検証に加えて、残された作品を一点ごとに丁寧にみることによって引き出せることはないかを探ってきました。実際に目にできたり存在を確認した作品は下絵などの資料を除いても約550点にのぼります。その内容は今回図録に作品総目録を掲載しようという、展覧会開催と同時に進める業務としては無謀ともいえる挑戦を敢行中ですので、皆様にご覧いただくことができる予定です。調査の過程では新資料も多く見いだされましたので、展示ではできるだけそうした新しい側面を示す作品をと出品の願いをしました。何しろ当館には一点の所

蔵作品もなく開催する展覧会です。借用先の数は実に40件にのぼり、個人の方がほとんどで、多くのご協力と励ましをいただきました。

展覧会は、生涯の軌跡を追いつつ作品を編年していくオーソドックスな構成としました。栃木に生まれまもなく上京、東京・四谷界隈で転居を繰り返した「東京時代」、千葉寺町へ移り戦前戦後を過ごした「千葉時代」、石川県や九州・四国・紀州への旅を経て、「奄美時代」と、生涯を住む場所によって3期に分けています。本稿ではこれに添いつつ、新たな話題と見所をご紹介します。

「東京時代」の米邨(一村のはじめの画号)についてまず目を惹くのは、中学在学中から職業画人として成り立つ書画の訓練の跡で、新しく紹介される作品群にはその姿がまざまざと見られるはず。東京美術学校に入学し二ヶ月で退学した頃、大正末からは「海上派」と呼ばれる中国の上海画壇の様式の追随一辺倒となり、絵だけでなく、書や篆刻の雰囲気もよく模しています。昭和3・4年頃、その腕前も需要もピークに達していたことが分かるでしょう。この時期までにあった日中交流の様相を強く反映していますが、これは革新の道筋をたどる近代日本美術史の文脈では語りづらく、それを受け止める需要の有様についてもあまり触れられていなかった領域です。一村の作品固有の問題としても、これまでは縁者のもとに残されていたある意味“伝来の確かな”もののみを対象とするところがあったため、積極的に扱われていませんでした。「売り絵はしない」とか「人と同じ絵は描かない」という一村にとって大切な芸術家伝説の存在も、この時代を扱いたくない方向へ働いていた面があるかもしれません。しかし、この新進の文人画家のあり方は、さまざまな面から興味深く、多分野のご関心の向きに示唆を与えることも多いと予想します。

次に一村の生涯の軌跡をたどるとき必ず触れられるのが、「23歳の時、本道と信ずる絵を支援者に見せたが受け入れられなかった」という語りです。これは後年の本人の手紙を引用したもので、「南画と決別」「空白期」というような見出しでイメージが固まりました。作品に年紀をしなくなる

《不喰芋と蘇鐵》個人蔵



《艶鞠図》昭和3年 個人蔵



《ずしの花》色紙 昭和30年
田中一村記念美術館蔵



スケッチブックより
田中一村記念美術館蔵



《不喰芋と蘇鐵》個人蔵



図*1 《白い花》昭和22年 個人蔵



《熱帯魚三種》昭和48年 個人蔵



《黄昏》個人蔵



《菜草図天井画》昭和29年
やわらぎの郷聖徳太子殿
images©2010 Hiroshi Niiyama

こと、縁者のもとに残されて知られていた作品が少なかったこと、この時期のことを語る関係者はもう世代的にいないことなどの理由があったと思われますが、しかし作品全体の編年を試みると、さまざまな画風と画題へ手を伸ばしていたことがわかってきました。

「千葉時代」に見せる新たな面は、戦後の心機一転の様相でしょう。この時期の主要作品が実際に一堂に会すのは初めてのことだと思います。画号を「一村」と改め、公募展に挑戦し、《白い花》(図*1)が青龍展に初入選するなどの実も結びますが、その前後には画題や表現もさまざまなものに取り組み、試行錯誤をし、目的により使い分けもする幅を見せ始めます。屋敷の障壁画をまかされるような大きな仕事も経験し、その習作的副産物もかなり生まれました。今回、一村が手がけた2カ所の天井画も初めて揃え復元的に展示する予定ですのでご期待ください。

千葉時代の絵を通覧して感銘を受けるのは、そうした独歩の画家の生き方を貫けた周囲の支え、千葉の地元への懐というものです。千葉は軍都であり、軍人と医者と役人の闊歩した町。確かに支援者は医療関係者繋がりが中心ですが、少し行けばにぎやかな町並みも海もある環境で、一村が千葉寺近辺の身近な農村風景を時に文人画の理想郷的な表現になぞらえもして繰り返し描いた点、そうした地元へ向けるまなざしは、周囲が自然に作り出していったものでしょう。「文化果つる地」などと自嘲しがちで気取らない千葉の人々ですが、誇りを持って見てよいことではないでしょうか。

独学の画家は、自らの様式を築き確信を持つには長い時間を要し、画家人生をどうしていくのかという煮詰まった状況に陥ったはずです。50歳を迎え最後の転機をかけて、南への移住に踏み切り、以来約20年。奄美で仕上げることでできた作品の数は、本展においても少ないままです。しかしこれらこそが一村を一村たらしめた集大成。本展では、その代表作のほとんどが揃うという、現在とこれからの状況を鑑みるにもうこれ以上望めないほどの展示が実現します。

さらに、昨年度、一村のスケッチブックや蔵書や印などの遺品も含む大量の資料が田中一村記念美術館に収蔵されることとなり、本展はそれらの内容にも踏み込んだ実質的な初公開の機会となります。スケッチブック11冊のほか、多くはちぎれたような紙片であったり、自ら破りつつ資料用らしき図版であったり、整理前はばらばらの紙の山でした。千葉には奄美移住後も処分せずに残しておかれた蔵書や資料類がありそれらは一村の最晩年にまとめて

奄美に届けられましたが、そうしたものも含め、幾人もの手で今日まで守られてきたのは奇跡的なことです。これまで知られていたのはその断片ですが、もっともっと膨大な量のスケッチをし、構想を練り、構図を試し、計算をして…という、画家としての日々の営みが浮かび上がって見えてきます。その他見いだされた資料や、撮った写真、題名などの再検討を通じて、奄美での作品をより豊かに見直していけることを目指し、願っています。

今日に至るまで、さまざまな立場や思いで田中一村とその絵に関わってきた方々に出会い、全く関わりのなかった自分が今から出来ることは何かを自問しつつ準備を進めてきました。「新しき全貌」と銘打ったとはいえ、一人の画家の人生がひっくり返るほど変わるはずはなく、そんな全貌は知りたくなかったということにもなるかもしれません。しかし「私の一村」という語りの集積だけでできた閉じた世界はまもなく終息してしまうでしょう。大仰な言い方にはなりますが、将来も多くの目で見ていくことのできる画家と作品になるための出発点となりその礎となることが本展の使命かと思います。会期まで2ヶ月を切った今は膨大な作業量をこなすだけで必死の状況ですが、こうした思いの伝わる展示をつくることができ、多くの皆様にご覧いただければ幸いです。

[学芸員 松尾知子]

開館15周年記念特別展 田中一村 新たなる全貌

2010年8月21日(土)▷9月26日(日)

10:00—18:00(金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 9月6日(月)

[観覧料] 一般 1,000(800)円

高校・大学生 700(560)円

小・中学生 無料

※()内は前売り、団体30名様以上、および市内在住60歳以上の料金

※障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※前売券は千葉市美術館ミュージアムショップ(8月15日まで)、ローソンチケット(Lコード:38308)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口にて販売(9月26日まで)。

同時開催 わが心の千葉

[観覧料] 一般 200(160)円

高校・大学生 150(120)円

小・中学生 無料

※()内は団体30人以上の料金

※千葉市内在住60歳以上、千葉県在住の65歳以上の方、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※同時開催「田中一村 新たなる全貌」入場者は無料

「わが心の千葉」展を開催します。2010年8月21日(土)▷9月26日(日)

無縁寺心澄(むえんじしんちょう 本名・藤井茂樹 1905-45)は昭和戦前期に千葉市を中心として活動した画家です。1926(大正15/昭和元)年に川端画学校を卒業し、主に水彩やテンペラ画を制作していました。28年、第9回帝国美術院展覧会第2部(洋画)に初入選し、30年には日本水彩画会会員となりました。画学校卒業後三年ばかりの間は東京の図案会社に勤務していましたが、退職後は制作に取り組む他、36年に千葉県美術協会の設立に参加、運営に尽力しました。

遺された何枚かの自画像や写真を見ると、画家は縮れ毛の長髪で、洋服なども当時の社会人が着ていたものとは雰囲気異なっており、当時の街中で非常に目立つ姿だったことは容易に想像されます。

市内浜野町にお住まいだった無縁寺心澄のいとこにあたる故・白井三郎氏は、おじから託された無縁寺の作品を多数愛蔵しておられました。生前の氏は中学校の美術教師を勤めながら無縁寺の遺作展を開くなど画家の顕彰に努め、美術館開館前の千葉市に1987年から翌年にかけて《機関庫の昼》など3点のテンペラ画を、90年(平成2)年には関連資料を含む全936点を一括御寄贈下さりました。その大部分が千葉市内を中心とする風景画であり、その画風は対象を大づかみに捉まえ、速い筆の運びで一気に仕上げている作品に

端的に現れています。

千葉市は1945年6月と7月、三度に及ぶ大空襲によって市の中心部を焼失しています。そして、戦後の埋め立てと工場誘致に代表される開発。無縁寺が描いた風景画は美術作品としてだけでなく、ありし日の千葉をしのぶ資料でもあります。千葉市美術館ではこれまで無縁寺の作品を所蔵作品展で紹介し、2004年に市民ギャラリー・いなげにおいて「無縁寺心澄～わが心の千葉風景～」を、また美術館展示室休室中の昨年には千葉立郷土博物館を会場として同館と共同で「無縁寺心澄の描いた千葉～絵と写真で見る戦前の千葉～」を開催しました。特に昨年の展覧会は、当時の写真や地図を併せて展示することで、無縁寺が描いた千葉を立体的に紹介し、多くの来場者の皆様から御高評をいただきました。

無縁寺が千葉を描いていたちょうどその頃、田中一村が千葉に住んでいました。今回は市内外から来館して下さる皆様に、無縁寺の作品によって一村が住んでいた頃の千葉とはどのような土地であったかをご紹介しますと共に、終生千葉で制作を続けた画家の存在を広く知っていただきたく、企画しました。

[学芸係長 藁科英也]



無縁寺心澄《千葉中時計台》水彩、紙 昭和初期

ボランティア日和 episode24

『雪舟と水墨画』展の図録から2枚の紙切れに鉛筆書きのメモが出てきた。ある時の〇〇小学校6年生と見る2箇所の絵(テーマは風景と人物像)についてのメモでした。

- 1これは何だろう =「掛け軸」。紙に墨で描かれ色も少しある。
- 2何が描かれている?目に付くものは=人。橋。滝。木。山。湖。舟。
- 3気になる描き方は=木が横向き下向きに生えている。人は何処へ行くのだろう。山の頂上まで描かれていない。
- 4少し離れて右の絵と比べてみる =雄大な風景。人がちっぽけ。どこか想像の風景みたい。

もう一枚のメモは

- 1これは何? =「ふすま」の絵。
- 2何が描かれている? =中国の学者みたいな人達。松、岩、芭蕉。
- 3何人いる?何をやる人達? =絵かき、書家、詩人、音楽家、など。
- 4どんな色? =墨主体で薄い色の部分もある。

「鑑賞リーダー」は美術館活動の一つで、来館する小中学校の生徒数によって7人~10人位のグループに分け、企画展毎に展示フロア、スペース、作品の配置場所も替わるので、予めグループ鑑賞用の展示スペースを決め、一般来館者に迷惑がかからない様、グループ間の移動に無理がなく、かち合いもなく鑑賞がスムーズに出来るよう配慮します。

先ず、美術館の11階の講堂で初対面。学芸員がボランティアを

紹介。いよいよ展示会場へ出発。「鈴木組はこちら」と手を挙げてエレベーター前に誘導。素早く人数確認。今日は「孫のような9人だ」。一番前の生徒に「迷子にならないように皆も見ているね」「一緒に仲良く楽しく見ようね」。一瞬顔がほころび、緊張が解かれる最初の瞬間。鑑賞の始まり。入り口から入るや否や大きな声で、「ウアー、スゲー!これ本物?」。彼らはどんな想像をしていたのか、今まで見たこともなかった掛け軸の大きさに驚いたのか?絵の魔法にかかったのか?最初的水墨画を前にして色々な感想が出ました。絵に近づいたり、横に移動したり少し離れて見たり、最後に「おじいちゃんの家には掛け軸があっけいつも飾ってあったよ」と。予定の10分はあっという間に過ぎました。

もう一枚は襖絵の中央に配置された書家が何かに向かって筆を揮っている部分。それが「石壁」か「木」か男の子たちが真剣に思いを述べました。

本物を目の前にした子供たちの真剣な眼差しに、かつて私の時代には美術館で本物を見る機会などは夢の夢。かなわなかった夢と今の幸せがふと一瞬ダブリました。

[美術館ボランティア 鈴木高雄]



◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度上期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

[時 間] 14:00より(開場は30分前)

[場 所] 11階講堂

[定 員] 先着150名(入場無料)

○ 第3回 7月24日(土) 「勅使河原蒼風とモダニズム」
[講師] 藁科英也(当館学芸係長)

○ 第4回 8月14日(土) 「バーナード・リーチと
日本の銅版画家たち」
[講師] 西山純子(当館学芸員)

○ 第5回 9月11日(土) 「田中一村と千葉」
[講師] 松尾知子(当館学芸員)

市美術館開館15周年記念「もう一度見たい思い出の展覧会」募集

千葉市美術館は、「房総ゆかりの作家・作品」、「版画を中心とした近世・近代の日本絵画」、「現代美術」をコレクションの3本柱としており、これまで数々の特徴的・個性的な展覧会を開催してきました。

今年11月3日に開館15周年を迎えるのを記念して、当館では皆さまより「もう一度見たい思い出の展覧会」を募集します。

応募の方から抽選で20名様に、素敵なプレゼントをご用意しております。ふるってのご応募、お待ちしております。

●応募内容・展覧会名

・コメント

*住所、氏名、電話番号、年齢、職業を明記の上、ご応募ください。

●応募方法 以下のいずれかをお願いします。

1. ハガキ：〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 開館15周年記念係宛
2. 展覧会会場アンケートBOX 設置所
3. FAX：043-221-2316
4. Mail：15kinen@ccma-net.jp

●応募期限 平成22年8月15日

*ご応募頂いたコメントなどは、当館1階情報コーナーなどで公開する場合がございます。

*過去の展覧会名を知りたい方は、当館ホームページより「千葉市美術館トップページ」→「展覧会情報」→「過去の展覧会」をご覧ください。

*当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



[交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より
- 徒歩約15分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分
- バスのりは7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」または「大和橋」下車徒歩3分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉県中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
[発行日] 2010年7月6日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社



<http://www.ccma-net.jp>

